

県立上総博物館では今年の史跡研修のテーマとして「古い江戸・新しい東京」をシリーズとして行っています。その下検分が私の役目で、今回は両国から深川あたりを歩いてきました。両国駅で下車して先ず大江戸博物館へ寄り、11月から開催される浮世絵展を確認して外へ出ると、何処からか笛と太鼓の音が聴こえてきました。音を追いかけて回向院を抜けて裏手へ出ると、小さな神輿がビルの谷間の路地から現れてきました。赤い半纏の子供達は肩が痛くなったのか、担ぎ棒を抱える様にしている娘もいました。大都会のすぐ裏通りを総勢30人位の神輿の統御に下町の哀歓を感じて私は眺めていました。

安田庭園、清澄庭園（旧岩崎庭園）を抜けてタクシーを門前仲町で捨て、富岡八幡、深川不動にお参りしました。深川江戸資料館に入ったのはもう2時を過ぎていました。台風13号で雨模様の暗い資料館の地下へ降りますと、そこは全く別世界が広がっていました。池波正太郎、藤沢周平が好んで描いた黄昏れて行く、小名木川、仙台堀、佐賀町あたりの江戸の風景が再現されていました。井戸端と囲んで九尺二間の漁師の家並び、米屋さん、漬物屋、八百屋、髪結床、大工、そして一膳めしや、路地は狭いが肩を並べて歩ける広さです。置かれた縁台に座って写真をとり、のれんをくぐって土間に立つと、私が生れ育った七十年前の故郷の我が家がありました。何処からか祖母が現れ、夕日を浴びて母が野良仕事を終えて帰って来そうな錯覚に襲われて胸が思わず熱くなりました。

海へ続く川岸には小さな伝馬舟が繋がれ、柳がゆれていました。私達は川にかかった小さな土橋に寄りかかって、しばらくは言葉も交わさず、ずっと動こうとしませんでした。

今にも向いの一膳めしやから彦十が顔を出し、橋の向こうから、鬼平とおまさや五郎蔵が突然姿を現れてもおかしくない情景と陶酔を与えてくれました。

今県内でこの様な要素を持っている所は、佐原、小見川、銚子らの利根川沿いくらいです。内陸では久留里、大多喜くらいでしょう。

見終わって表の路地へ出て、遅い昼メシを食べようとしたら「深川めしや」の前は長い行列でしたのであきらめて、深川不動の「トロロめし」としました。駄菓子屋のおばさん、漬物屋のおじさんもさすが江戸の深川っ子。景気よく、笑顔いっぱいでお客達を引き付けていました。この愛嬌、愛想のよさは千葉の人達に出来るだろうか。良い品を安く売ることは第一ですが、喜んで食べ、買って頂くこの方がもっと大切なことも深川に行ったら見て来て頂きたいものです。

城下町、街道宿場街の再開発をまとめるコツは千葉大などの先生、学生の協力を得て、データ、発想を中心に会議を進めて、絶対避けることは感情論的会議にさせないことと聞きました。古い町ほど総論賛成、各論反対は感情論—私的事情優先になり易いものです…と言われます。

久留里は城下町、名家が沢山あります。倉敷で行われている様に四季の時を選んで「お庭。お宝」拝見を出来れば観光客が周遊できます。

参考 深川江戸資料館（江東区白河町1-3-28 大江戸線清澄白河駅）